

Salon d'impressions

印象のサロン Vol.4

東京・六本木の国立新美術館で8月16日まで開催されている「オルセー美術館展 2010—ポスト印象派」。現代美術の源流ともいえる至宝 115 点が公開される空前絶後の規模の展覧会として注目を集める。各界の最前線で活躍する方々が「印象」をテーマにご自身の活動や作品への思いを語る「Salon d'impressions ~印象のサロン」、第4回は放送作家、脚本家など、多彩に活躍し、2010年度フランス広報大使を務める小山薫堂さんに語っていただいた。

後ろ姿に表れる関係性

印象派の美学を発展させ、厳密な色彩理論に基づいて「点描技法」を生み出した新印象主義の画家たち。数あるオルセー美術館展出展作家から小山さんが選んだのは、この一派に属していたシャルル・アングランの「道行く二人」だった。

自分で撮る写真に似ているんです。僕はカップルの後ろ姿が好きで、旅先でいい雰囲気のカップルを見つけると、こっそり後ろ姿を撮らせてもらったりします。後ろ姿には2人の関係性がよく表れる気がしますし、未来に向かって歩んでいくようなムードも好きなんです。特にお年寄りのカップルには、2人で変わらぬ愛を貫いてきた揺るぎなさや、普遍性のようなものが漂います。そこにうらやましさを感じるし、お互いの欠点を受け止めた上で、何かをあきらめているような人間くささも感じます。

僕には、自分が年寄りになったときに女性に支えられたいという願望があるので、特にヨポヨポのおじいさんを女性が支えているのを見ると、グツときます（笑い）。

でも、この絵の2人はどうでしょう。画面から感じるのは寂しさや冷たさですね。季節は冬の前後でしょうか。画面の右端にいる男性も謎です。ひよっとして自分が好きだった女性がカップルで歩いているのを見て、横恋慕の気持ちで描いたかもしれない。とすると、この端の男性は画家本人か。そもそも画家が、この情景を題材にしたのはどうしてなんだろうか――。

おそらくパリか、その郊外だろうということ以外、何ひとつ特定できない謎の1枚。でも、そういう不思議な絵だからこそ、豊かな想像力をかきたてられるのです。

今回の1点：シャルル・アングラン作『道行く二人』

謎が想像力をかきたてる



こやま・くんどう
(放送作家、脚本家)
熊本県生まれ。2003年「トリセツ」(テレビ朝日)で国際エミー賞受賞。現在も「東京会議」(BSフジ)などを手掛ける。映画「おくりびと」では脚本を担当。ラジオのパーソナリティーや雑誌連載、商品開発、空間プロデュースなど多方面で活躍中。著書に「食入魂」(ぴあ)、「フィルム」(講談社)など。



シャルル・アングラン
「道行く二人」1887年
油彩・カンヴァス
38.5 × 33 cm
©RMN/Musée d'Orsay /
Hervé Lewandowski /
distributed by AMF

小山薫堂さん



新印象主義が登場した19世紀末は、急速に発展した近代文明やブルジョワジー的ライフスタイルへの反動が起きた時期。新印象主義の画家の中にはラジカルな思想を持つ者も多かった。この絵でも「労働者階級と貴族階級の人間的価値は全く変わらない」というシャルル・アングランの主張が市井の2人に込められているようだ。

確かにこの情景は、よほど強い思いがないと描かないだろうのもでしょう。点描技法はとも時間がかかりそうだし、パリというとても絵になる街の中、歩くだけで胸がキューンとなる、誰もが恋をしたくなるあの街で、あえてこの瞬間を切り取ったわけですからね。

でも、僕はこの絵が嫌いではありません。もし自分がこの絵を持っていたら、自宅の玄関の内側の、うちに遊びにきたお客さんが帰るときに見える場所に飾りたい。去り際に見ると、絵が「さようなら」と語りかけてくるようで、見え方も変わる気がします。

記憶に印をつけるアート

小山さんは自宅やオフィス、自分がオフィスを務める店などを、好きな絵画や写真で飾るのを好む。旅先で美術館を訪れたときも自然と「この作品ならどこに飾ろうか」と考えてしまうという。

絵も写真も、どちらかというと自分の手元に置いておけるものが好きです。だから、ルネサンス期の大きな宗教画よりは、ポスト印象派以降の、装飾のための絵画に心引かれます。今回は挙げませんが、ゴッホも好きですね。ゴッホの作品は、あの独特のタッチがポップでカッコいい。山

下清にも通じる何かを感じます。僕にとってアートとは、普段の生活を豊かにしてくれる、大切にとっておきたい記憶に「印」をつけてくれるもの。そういう1枚を探しに、画廊にもよく足を運びます。旅先で無名のアーティストの作品を気になって衝動買いしたこともありまして、若手のアーティストに頼んで自宅やオフィスに壁画を描いてもらうこともある。自分の好きな作家は大切にしたいと思っています。

楽しい暮らしを考えるウェブサイトで「イエラボ」を主宰し、快適にくつろげる空間づくりに並々ならぬ関心を示す小山さんにとって、アートはインテリアの一つ。空間とアートの組み合わせを考えるのが楽しいそう。時には自作の写真も飾るが、そこにはちょっとした遊び心が――。

自分で撮ったモノクロの風景写真の中から、インテリアとして客観的にカッコいいと思うものを、自宅や友人のワインバーに飾っています。

実は僕にはワインのシャトー名と自転車メーカー名を掛け合わせて作った「アレックス・ムートン」というカメラマンネームがありまして、飾る写真にはそのサインを入れています。わざと外人写真家にいそうな名前にしたのです。遊びに来た友人に「これ、アレックス・ムートンなんだよ」と言うと、実際、半数くらいは「へえ、すごいね」と驚いてくれます（笑い）。そんな反応を見るのも愉快ですし、飾ってある絵や写真をきっかけにアート談議が弾むのも楽しいものです。

切り取られた街角の風景 後ろ姿に感じるドラマ